

若き農業者の挑戦

自慢の野菜を 届けたい

須藤陽子さん 福島県福島市（JA新ふくしま管内）

農業のすばらしさにひかれ、約五十種類の野菜を無農薬で栽培。百軒余りの顧客への配達も含め、ほとんどの作業を一人で行う。堆肥を投入して作る野菜は、新鮮でおいしいと、顧客からの信頼も厚い。

文・渡辺征治 写真・鈴木加寿彦

すどう農園は畝間や株間が広くとられている。風通しをよくして病虫害を防ぐほか、耕うん機での管理をしやすくしている。



野菜を詰める袋にプリントされた、「すどう農園」のロゴマークは須藤さんがデザインした

顧客のもとへ宅配に向かう。「作っている人がわかるから安心だし、新鮮でおいしさも格別ですよ」と、須藤さんの野菜に信頼を寄せている

福

島市街のランドマーク、信夫山（しのぶやま）を南に仰ぐ住宅街のまん中に、「すどう農園」の圃場（はしやう）が広がっ

ている。そこでは須藤陽子さん(29)が、盛りの夏野菜を収穫していた。無農薬、無化学肥料で栽培した野菜を市内百軒余りの家庭と十軒の飲食店へ、毎週月、水、金曜日にみずから配達している。

「近くの川向こうにある畑も合わせて、一ヘクタール。これが、すべての作業を一人でできる精いっぱいのはりですわね」
強い日ざしで滴る汗が、須藤さんの頬（ほ）を伝う。もともとこの圃場では、叔母がリンゴを作っていた。

「幼いころリンゴの木の間を走りながら、農家っていいなって単純に思っていました。両親とも農業に縁はありませんが、祖父（故人）は福島県矢吹原経営伝習農場（現福島県農業総合センター農業短期大学校）の校長を務めた人で、農業を選んだのは祖父の影響だねって言われることもあります」

中学生から高校生にかけて、近くの川で汚れがめだつようになった。身近な環境の変化を感じ取り、人が自然環境と共生する方法を研究したい、と思うようになる。そして、京都精華大学に入学し、環境問題を総合的に学ぶ。とくに三年生後半から行った、あるテーマに即

した場所で対象を観察するフィールドワークが須藤さんを農の道へと動かした。設定したテーマは「命のつながり」だ。

「ウシの解体処理の現場も見たし、自分で二ワトリの解体もしました。ふだ目に見えない場面まで見なければ、共生を実現するために何をすればいいか、その答えは出せないと思って……。生命をもらい受ける重さを知りました」

その後、全国には農薬も化学肥料も使わず、環境に負荷をかけない有機農法を実践する人が多くいることを知る。実際に訪ねて交流するなか、農作業の体験を重ねた。そこで、ある答えを確信した。

「命を育てて、それをいただく自分で生きる。農業こそまさに、人が生活を持続しながら自然と共生している、一つの姿でした」

すぐにでも、 農業を始めたかった

平成十六年、須藤さんは帰郷した。有機物を堆肥として施した土壌で無農薬栽培をする、という理想の農法を実現するための。人と自然が共生している農業への興味は抑えられなかった。

「母は、もっと年齢を重ねてからでも就農できるじゃないかって困惑していました。でも、わたしはすぐにでも、自分の



野菜の状態を見極めながら管理を行う。つねに試行錯誤の連続で、現在はタケの粉末を使った液肥づくりに挑戦している

農業を始めなくちゃと思っていたんです。農業以外は考えられませんでした」

そして、二本松市で三十年以上も有機農法を実践する、J・Aみちのく安達二本松有機農業研究会の大内信一さんのもとへ毎日通うようになった。土づくりも苗作りも、そこで一から教わった。

一年がたち、須藤家の農地ではリンゴの木がすでに切られていた。その五十アールの圃場をトラクターなどとともに譲り受けて「すどう農園」はスタート。専門機関の土壌診断を受けて土壌成分の過不足を補うほか、完全堆肥の施肥や無農薬での栽培など、手間をかけて作った自

一年がたち、須藤家の農地ではリンゴの木がすでに切られていた。その五十アールの圃場をトラクターなどとともに譲り受けて「すどう農園」はスタート。専門機関の土壌診断を受けて土壌成分の過不足を補うほか、完全堆肥の施肥や無農薬での栽培など、手間をかけて作った自

新規就農者でも自立できる、そのモデルとなるような経営にしていきたい。

●すどう農園の収穫スケジュール (一例)

<p>エンドウ チンゲンサイ キャベツ リーフレタス アスパラガス ミツバ カブ ラディッシュ かぶれ菜(福島 の伝統野菜) グリーンピース ナバナ</p> <p>(ほぼ通年で収穫) ダイコン コまつナ ホウレンソウ シュンギク レタス</p>	<p>ソラマメ ナス パプリカ タマネギ ニンニク ジャガイモ</p> <p>(秋まで収穫) インゲン シシトウ オクラ トマト ズッキーニ トウモロコシ キュウリ カボチャ ツルムラサキ モロヘイヤ</p>
<p>ダイズ ホウレンソウ</p> <p>シュンギク タアサイ</p> <p>ナバナ キョウナ 小ネギ</p> <p>芽キャベツ サニーレタス</p> <p>リーフレタス</p>	<p>(冬まで収穫) 小ネギ ゴボウ ニンジン</p> <p>ブロッコリー ハクサイ</p> <p>レタス サツマイモ サトイモ</p> <p>キョウナ キャベツ 芽キャベツ</p> <p>(冬まで収穫) チンゲンサイ カブ 辛味ダイコン ラディッシュ</p>

栽培する野菜は年間約50種類。1haの畑を効率よく使えるよう、栽培しながら品目を選択。トマトの隣にバジルを植えるなどのコンパニオンプランツを導入するなど、さまざまな工夫をとり入れている。11月には、顧客を招いて収穫祭を盛大に催した。畑の一角に築いた石窯でとりたて野菜のピザを焼き、好評を博したという。



夏の宅配セット(配送料込み1500円)は、ミニトマト、ズッキーニ、ミズナス、伏見トウガラシ、キュウリ、オクラ入り。ロゴ入りのエコバッグに、野菜の食べ方の参考にレシピも同封して届けている。

(「すどう農園」のホームページは
<http://www3.ocn.ne.jp/~youko/index.htm>)



収穫した野菜を規格ごとに分けながら袋詰めしていく。野菜のおいしさが口コミで広がり、関東圏の飲食店15軒にも発送するようになった



環境への負荷を抑えようと、ハウスは保温のみに用いる。圃場には牛糞をベースに15種類ほどの有機資材を合わせた完熟堆肥を施用する

慢の野菜を市場へ出荷した。しかし、ホ

ウレンソウについていた値は一袋四十円。

「そんなわけではないでしょう、って思いましたね。安売りはしないぞ、と意地にな

ってスーパーの産直コーナーに置いても

らいました。でも、それだとお客さんの

評価がわからなかった。自信はもって

たけど、もしおいしくないのなら、直接

そう言われたかったです」

行く末に悩んでいたところ知人に紹介さ

れたのが、料理人も集まる勉強会。料理

のことを知らなければ野菜の善し悪しは

わからないと思い、入会した。

「そこで自分の野菜も食べてもらいま

した。しっかりと味をもっとおいしい野菜

とプロに評価されたことはすごくうれ

しかったです」

気に入ってくれた飲食店に野菜を納め、

店にチラシを置いてもらい、一般の家庭

にも直接販売を広げることになった。し

かし、特定の野菜に注文が集まるとすぐ

に足りなくなってしまう。

「そこでお勤めの野菜をセットで届ける

スタイルに変えました。旬を味わっても

らいたいのので加温ハウスは使いません」

現在は六十代の男性をパート雇用し、

農作業を手伝ってもらっている。新規顧

客もわずかながら受け付けているが、対

応できる顧客数をさらに増やすため、い

ずれば遊休農地を借りてパートを増やし、

畑を広げたいと考えている。

多彩な活動で

農業の可能性を追求する

須藤さんは食に関する多様な組織と交

流をもち、自分の糧とするためにエネル

ギッシュに活動している。JAの正組合

員には婦郷と同時に加入し、青年農業者

が情報交換しながら販路拡大や技術向上

を図る「新ふくしま岡山農業樹立クラ

ブ」のメンバーにもなった。さらに、生

産者だけでなく消費者も所属するスロー

フード福島にも四年前の設立時から入会

し、今年には会長を務めている。

「ほかの農家とたがいの圃場を見学する

などして、わからないことがあれば気軽

に開ける仲間が増えました。農家だけで

なく、消費者や料理人との交流も増えて、

さまざまな立場の人の意見にふれて自分

の視野が広がりましたね。経営にも反映

されていると思います」

クラブでは休耕田で菜の花を栽培し、

なたね油を搾油した。またスローフード

福島では酒米の田植えから酒造りまでを

体験した。こうした活動を通じて、農業

が地域にもたらす可能性を追求している。

「それでも、自分の活動の原点はこれか

らも地元の人に野菜を食べてもらうこと

です。宅配する顧客の範囲は、自宅から

車で十五分前後が目安。フードマイレ

ジの問題もあるし、なにより地元産

物は、地元で買い支えることによって作

りつづけられ、守られていくべきだと考

えています」

最近福島市が新規就農者の育成をめ

ざして開講した「農のマスターズ大学」

の実習地として圃場を提供し、研修生に

実地指導をする。農業を始めたい、と訪

ねてくる若い人も多いそうだ。

「新規就農者でも短期で自立できる、そ

のモデルとなるような経営にしていきたい

いですね。今後は、すどう農園の法人化

も視野に入れています。今は無理をし

て畑を広げすぎないで、野菜の品質を上

げていくことが先決です」

と、須藤さんは力強く話した。人と自

然が共生する農業のあり方を追究する挑

戦は、着実に実を結ぼうとしている。